

# 25年前新居に植え替え

## 内藤さん(米野木町)

### 日進の木・キンモクセイ物語

うだるような暑さの7月、米野木町の東部保育園の近くを歩くと、民家の生垣からこんもりと茂ったキンモクセイの木が頭を出しているのを見つけた。広い日本庭園には一面に芝が植えられ、緑がとても美しい。

「剪定はできませんが、芝だけは2、3週間に一度は刈っています」。内藤千津子さん(67)、長男夫婦の寛行さん(40)、愛さん(41)、孫の優生君(小学5年)の家族が迎えてくれた。家は25年前に新築した。それまでは今の自宅から程近い場所に住んでいた。

自宅隣には工場があり、寛行さんはプラスチック部品の製造業を営む2代目だ。昭和50年代半ばまでの家は木材業。東部保育園の建物が、まだ東小学校だった頃を知る地元の人らは、周辺に材木が積まれていた記憶を今でも覚えている。

千津子さんは「木が多いのは先代のおじいさん、おばあさんが盆栽好きだったから。キンモクセイは記念樹でもらったもので、マツと一緒に古い家から植え替えた」と話す。記念樹は2本あり、庭の東西で育つシンボルツリーだ。いずれも高さ3メートル程。キンモクセイが町の木に決まった昭和49年頃から数えると、樹齢四十数年になる。

先代は、商売人だけに縁起木にこだわっていたといい、「家や財を持ち」「金を借りん」「難を転ずる」の語呂にちなんで、大きなモチノキやカリン、ナンテンなどの木も植えた。

「庭で遊ぶのが大好き」という優生君は、サッカーをしたり、5歳の愛犬ロクくん(黒柴・雄)と駆け回ったりする。5月の連休には友人家族らとにぎやかにバーベキューを楽しみ、キンモクセイの花が咲く10月には、家族全員で甘い匂いに癒されているという。

寛行さんと愛さんは同級生。平成16年10月、当時28歳で結婚した。寛行さんの亡き父、巨人<sup>のぶと</sup>さんはその頃闘病中で、いち早く晴れ姿を見せたかった。しかし、その年の4月、56歳の若さで亡くなった。

寛行さんは、それまで飲食業に携わっていたが、家業を継ごうと決心した。受注は主に自動車部品が多く、「製品に1個でも不具合があれば1万個に影響してしまう。苦労はありますが家族と従業員でやっていたら」と工場で汗を流す。

千津子さんは「いいお嫁さんが来てくれて楽になりました」と喜び、愛さんも「米野木は祭りも盛んでいい所。今年はおじで子ども会の役が



↑キンモクセイと納まる内藤さん家族。こだわりの芝は千津子さんがきれいに管理

当たって忙しいです」とすっかり溶け込んでいる。  
寛行さんらはキンモクセイを眺めながら願う。「おやじがもう1年、

2年でも生きていてくれたら孫の顔も見れたのに。みんなが健康ならそれで十分。息子の成長が一番の楽しみです」(広)